

法華寺旧境内の調査

—第419・426次

1 第419次調査

はじめに

第419次調査は、個人住宅建築のための事前調査である。調査地は、法華寺伽藍中心部ののる尾根から、ゆるやかに下る緩斜面の末端にあたり、調査地の南を通る東西道路をはさんで、地盤はさらに一段低くなる。東西両塔推定地のほぼ中央に位置することから、参道・門等の施設の検出が期待された。また、西側の隣接地で1975年に実施した第95-4次調査では、建物1棟、東西石組溝1条を検出している（『1975平城概報』）。東西溝は南縁にのみ川原石をすえるもので、南方に位置する建物の基壇縁をかねていた可能性が指摘されている。

調査面積は58.1m²（南北約9.6m、東西約6m）、調査期間は、2007年3月8日から3月16日までである。

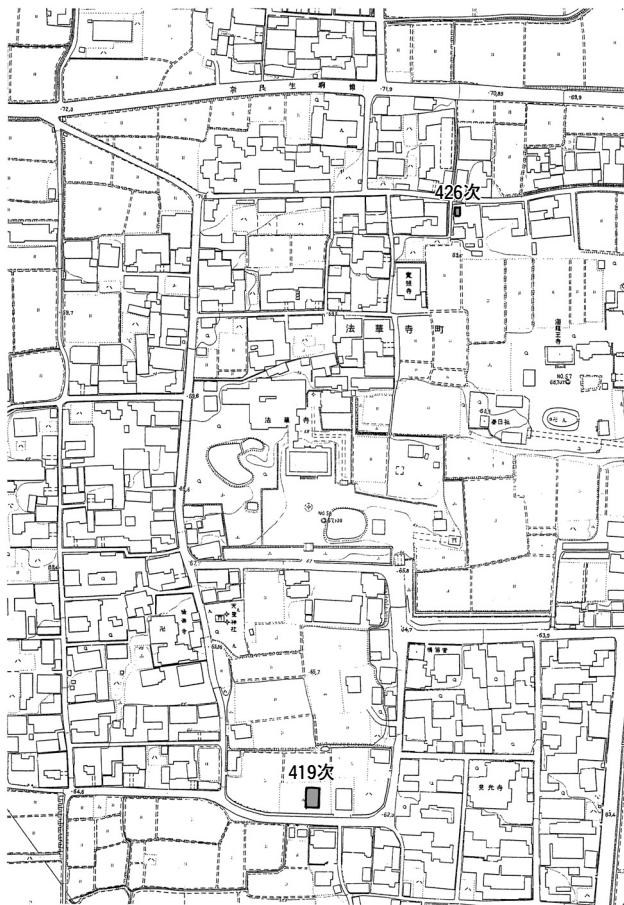


図174 第419次・426次調査区位置図 1:4000

基本層序

調査地内の基本層序は、表土（住宅解体時の搅乱土）、客土、耕作土、黄褐色あるいは青灰色のシルト質粘土層である。このシルト質粘土層上面を遺構検出面とした。調査区北端で現地表下約50cm、南端で75～100cmで遺構面に達する。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構には、素掘溝2条、石組溝1条、礎石状塊石2基、暗渠1条などがある。

SD9150・9151 調査区中央に素掘東西溝SD9150および南北溝SD9151がある。両者は当初幅1.5m、深さ30cm、調査区南端で深さ40cmで「」状に掘られていたが、SD9150は、北肩に粘土を貼り、溝幅を90cmほどに狭めている。またSD9151内には、西側の側壁にそって焼けた壁土の集積SX9154がある。

SD9151は後述する暗渠SD9157を設置する際に再掘削されるが、暗渠設置後も「」状の溝は維持されていたようで、溝内には腐葉土が厚く堆積する。溝に囲まれた東南部の方形の平場には、旧表土である黒色土とともに樹木の根の痕跡が認められた。また、溝の北側および西側は一段高くなっており、住宅建設のための整地以前は、溝に区画された「」状の地形を呈していたものと考えられる。

SD9153A・B 調査区西側の一段高くなったところで東西石組溝を検出した（SD9153B）。幅50～65cm、底石のみが残存し、20cmほどの円石を敷く。また断面観察で、この石組溝の下層に、幅70cm、深さ30cmほどの素掘溝がや



図175 調査区全景（南東から）

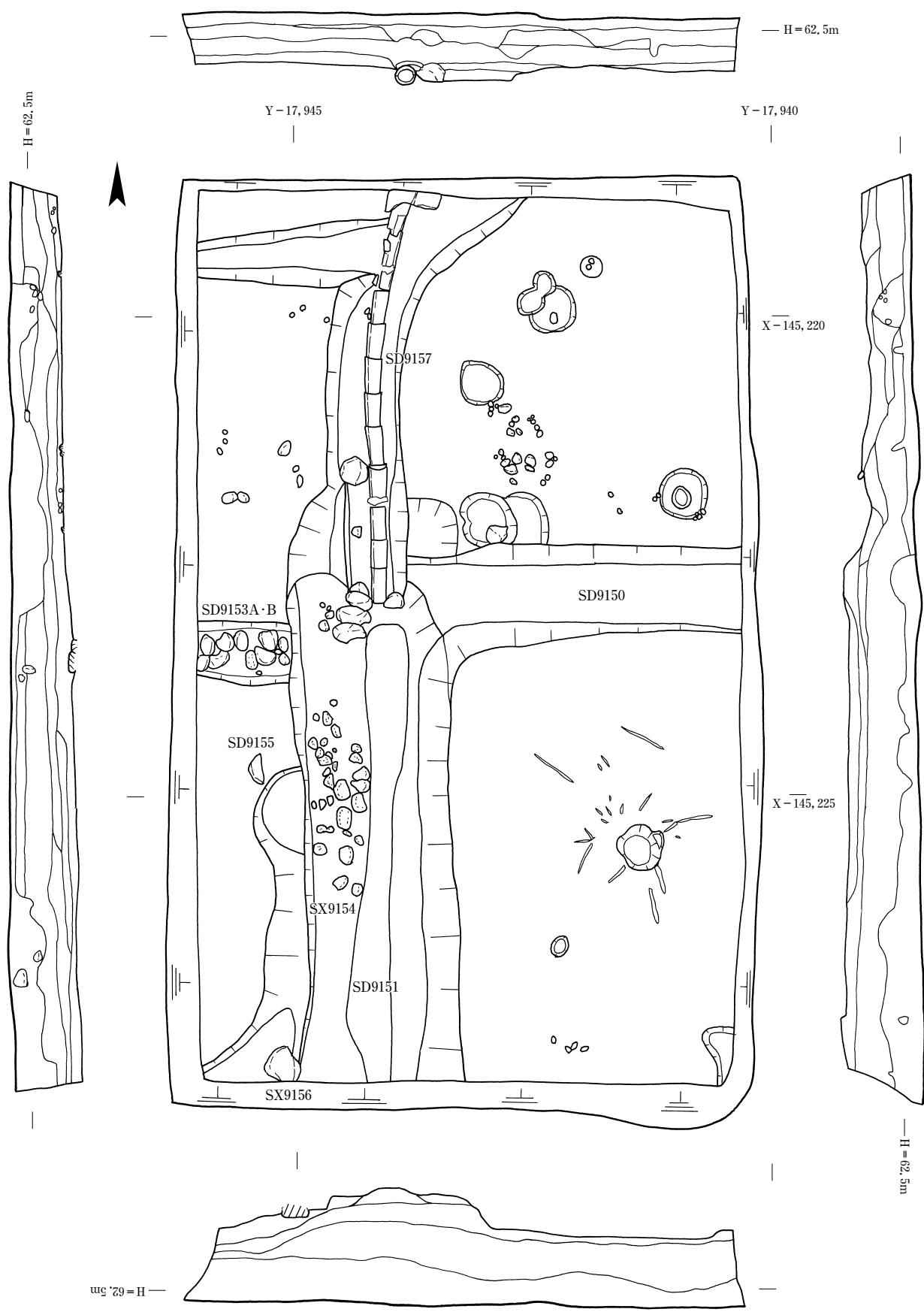


図176 第419次調査遺構平面図・断面図 1:60

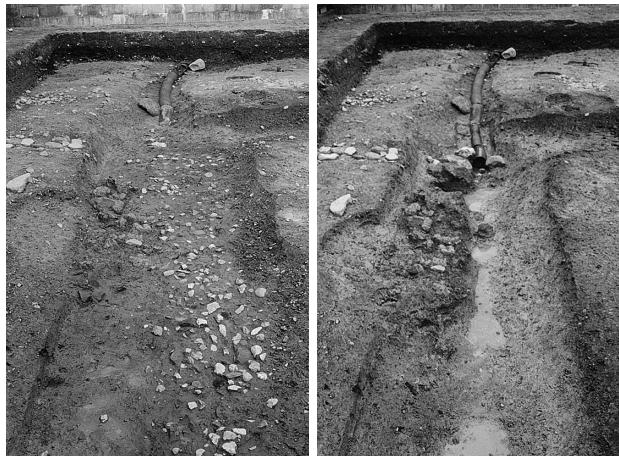


図177 SD9157検出状況（右 碓詰暗渠完掘状況）

や北にずれた位置にあることが認められた（SD9153A）。
SX9155・9156 SD9151の西肩で検出した礎石状の塊石。SX9155は長さ30cm、SX9156は長さ45cmほどの大きさである。平坦面を上にして据えており、南北にならぶ。両者の間隔は3mをはかる。

SD9157 SD9151に対して設けられた南北方向の暗渠。北側の一段高くなったところでは、丸瓦・土管混用の管を設け、下段ではSD9151を再掘削し礎詰暗渠とする。

上段では幅80cmの掘形を堀り管をとする。丸瓦・土管混用の管は全体で12節あり、調査区北壁にかかる北端部1節目には平瓦をかぶせる。北から3節は丸瓦の組み合わせ、次の6節を土管とする。ここで段が落ちるため、次の3節を丸瓦組として斜面に沿わせ、末端を塊石で固定する。丸瓦は上下で合わせ玉縁を南にし、土管も狭端を南にして接続する。

さらに、SD9151を、幅80cm、深さ20cmに再掘削し、南端の3節分が埋まる高さまで礎と瓦片を充填する。壁土集積SX9154は、この再掘削の際に壊されている。後述するように、丸瓦および土管の年代は、室町時代後期に属する。

出土遺物

出土遺物の大半は瓦類で、SD9157内から礎とともに埋められた破片が大量に出土した。また、同じくSD9157に用いられたほぼ完形の丸瓦12点および土管6点がある。このほかに、土器、壁土、鉱滓などがあり、全体で遺物収納用コンテナ約30箱分になる。（次山 淳）

土器 第419次調査で出土した土器は整理箱で1箱と少ない。磨滅した土師器・須恵器片が多数を占め、これに

瓦質土器片と、埴輪片が加わる。近世陶磁器はほぼ皆無である。SD9157南半の礎詰暗渠から14～15世紀の瓦質浅鉢（火鉢）片が出土しているほかに、遺構の時期を知る手がかりは少ない。

（森川 実）

瓦磚類 今回の調査で出土した瓦磚類の一覧を表23に掲げた。奈良時代の軒瓦はきわめて少なく、中世の瓦の出土が顕著である。そのうち、SD9157の丸瓦・土管混用管に用いられた丸瓦と土管の拓本を図178に示した。

丸瓦（1）の凹面には吊り紐痕が認められないものの、糸切り痕は確認できる。側面の凹面側の面取り部分にへラ書が記されている。ただし、その意味は不明である。土管（2）の外面には雷文状の刻印が残されている。なお、内面には明瞭に吊り紐痕が残されている。丸瓦・土管とともに室町時代後期に属するものであろう。（林 正憲）

小 結

法華寺の南限および南大門は、第123-4次調査で検出された区画施設から、今回の調査地の南、一段低くなった二条条間北小路に面していたものと想定されている。今回の調査地は、中心伽藍ののる尾根の南端にあたる。

西側隣接地の第95-4次調査で検出した石組溝について

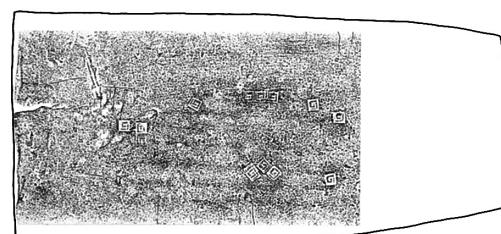
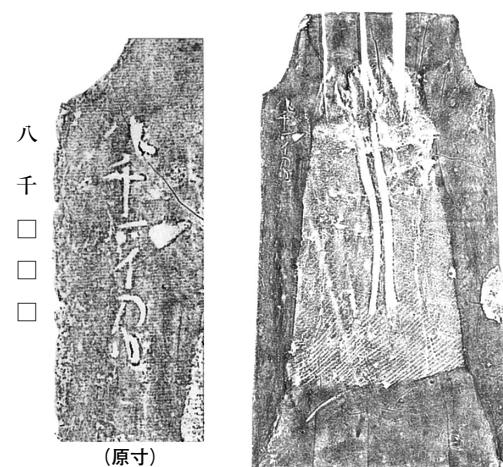


図178 第419次調査出土丸瓦・土管 1:3

表23 第419次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6132	A	1	6721	J	1
6311	Ab	1	室町		1
巴(中世)		5	中世		2
型式不明		4			
軒丸瓦 計		11	軒平瓦 計		4
丸瓦			平瓦		磚
重量	39.99kg		108.21kg		1.23kg
点数	329		1072		6
道具瓦計(18点)					
近世ヘラ書丸瓦 1点 刻印付土管(中世) 1点					
近世道具瓦 1点 雁振瓦 1点 完形丸瓦 10点					
丸瓦(雑) 2点 平瓦 1点 磚1点					

は、位置・形状などからSD9153Aが対応する可能性が高いものの、建物に関わる礎石位置は、両調査の対応関係が明確ではない。このように今回の調査では、門跡等に関わる明確な遺構を検出してはいないが、第417次調査の成果とあわせると、東西両塔推定地の中央に溝で区画された「匂」形の高まりがあり、その上に小規模な建物が建ち、北辺に石組溝を設けていたことが理解できる。

これらの遺構の時期を判断する材料も乏しく、SD9157との関係から、室町時代後期に先行する可能性を指摘するにとどめておきたい。

(次山 淳)

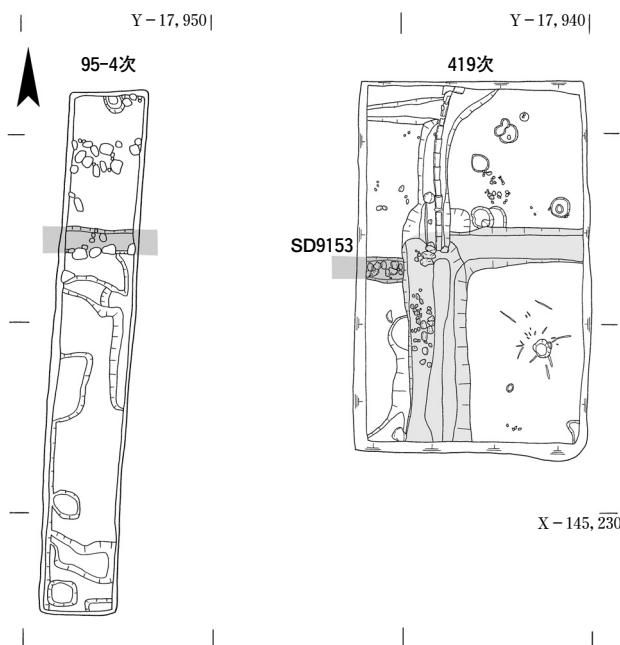


図179 第95-4次調査と第419次調査の関係 1:200

2 第426次調査

法華寺町内でおこなった共同住宅建設にともなう調査である。調査地は法華寺旧境内の北で、第417次調査(2006年度)の東15mにある。一条条間路北側溝想定地に南北長6m、東西幅2mの調査区を設定した。

調査地の層序は古家解体に伴う盛土、旧表土の下に暗茶色粘質土(25cm)と茶灰色粘土(10cm)があり、その下面で北端の溝状土坑、南端の弧状溝など近世の遺構を検出した。調査区中程では淡茶灰色粘土の薄層を介した地山(黄褐色土)面で、古代の東西溝SD9075と浅い土坑を検出した。

東西溝SD9075は幅約1m、深さ0.5mを確認した。第417次調査のSD9075の東延長部である。ただ、第417次調査では南北幅2.7m以上、深さ1mで、北半に浅い段をもつ構造を確認したが、今回は検出面が約1m低いえに、北半を後述の溝状土坑で壊されていて確認できていない。調査区北端の溝状土坑は、南北幅2m以上で西半に約8cm下がった段がある。暗灰色礫混土などが水平に堆積し、少量の近世末の染付碗が含まれる。水溜・掘割状の遺構と考えられる。調査区南端の弧状溝は西北から東南へ流れる。堆積層は暗灰褐色粘土・暗灰色砂・暗青灰色土の互層で、緩斜面をなす北岸の裾に幅約0.5m、深さ5cmの浅い溝をともない、腐朽した木質棒状品が遺存する。環濠の西南隅部の可能性がある。

遺物には土器、瓦類がある。土器は整理箱10箱分あるが近世の土師器、陶磁器類が大半で奈良時代のものは極僅かである。瓦類には鎌倉時代～近世の巴文を主体とした軒丸瓦11点、6679A型式、6685B型式各1点を含めた軒平瓦4点、丸・平瓦それぞれ約39kg・121kg、磚16片のほか隅木蓋瓦1片がある。

(西口壽生)

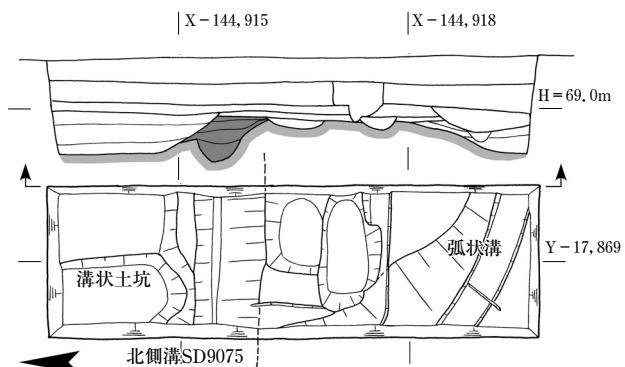


図180 第426次調査遺構平面図 1:100